

発言者	発言概要
小田議長	第Ⅱ章と第Ⅲ章の見出しに「（提言）」とあるが、第Ⅰ章で28期の提言の柱が明示されているので、もし記すなら「提言1」「提言2」、あるいはそもそも「提言」という言葉はなくてもよいのではないか。
小田議長	別表の「検討事項一覧」という見出しは、これから全ての項目を検討するような印象を与えてしまう。「施策一覧」、あるいは「取組事項一覧」などがよいのではないか。
中井委員	これから高齢者が増加していくと思われるので、高齢者を対象としたサービスについてもう少し書くとよいのではないか。 また、近畿大学アカデミックシアターを見学した際、漫画を読んでいる学生が多かった。人々の本への接し方がこれから変わってくると思われる中で、漫画等の扱いについても考えてもよいのではないか。
松本副議長	（中井委員の御意見を受け）日本に居住する外国人に図書館をなぜ利用しないのかという聞き取りを行ったところ、やはり言語の問題が非常に大きい。雑誌は結構利用したい、あるいは利用しているという方がいた。ビジュアルの側面が強いのが理由かと思ったので、外国人に対してのサービスの1つとしてはあると思う。
小田議長	（中井委員の御意見を受け）これまで協議会で積み重ねてきた議論と結びつけるためには、「第Ⅳ章 今後に向けて」に今の2つの課題があるということ、高齢者へのサービスは現行でも行われているけれども、それを改めて問い直すということでもあり、もう1つは漫画という新しい切り口での課題ということで位置づけるということでもよいのではないか。
古川委員	会議の前に4階企画展示室で展示を見学したが、会場がもっと下の階にあるか、あるいは印象に残る展示物を下の階に置いておくと、入場者増に結びつくのではないと思う。
古川委員	学校現場では、2020年までのオリンピック・パラリンピックの教育はやっているが、その後をどうするのかというのが1つの課題になっている。オリンピック・パラリンピックのレガシーについて都立図書館で学ぶことができるのであれば、行ってみようとなるかもしれない。
企画経営課長	（古川委員の御意見を受け）オリンピック・パラリンピックについては、1階で展示を行っており、それをコレクションして、レガシーとして今後引き継いでいくことを事業として考えている。
小田議長	（企画経営課長の発言を受け）まだ今後のことがよく固まっていないという状況だったら、提言として、それをぜひともやったほうが良いと協議会として述べることもできると思うが、既に一応の考え方をお持ちであるなら、提言の中に入れるよりは協議会で、それを一層進めていただきたいという意味を確認したということでもよいと思う。
坂口委員	7ページの「ICT利用環境の整備」の「（ウ）図書館のサービスと無関係な利用に対する考え方」という表現は、図書館資料を使わない人は図書館に来てはいけないと拒否している感じがする。図書館の情報資源を用いない利用者も包み込む考えで、将来このユーザーとなってもらうにはどうしたらいいかというポジティブな方向で考えたほうが良いのではないかと。

松本副議長	(坂口委員の御意見を受け)「無関係な」というのは I C T 利用環境という観点から、W i - F i を使ってユーチューブを見ているとか、要するにネットワーク環境だけを使っているが、その利用形態が図書館側の想定しているものとはどうも違うものがあるのではないかということについて、何らかの方針を確認したほうがいいのではないかと主旨であったが、おっしゃっていただいた方向でぜひ検討したいと思う。
小田議長	これまでの議論の中で、パソコンを持ち込んで W i - F i 等につないで、そこで自分の仕事をする、そういう利用の仕方も図書館としてきちんと位置づけるべきだという発言があったので、仕事ならよくて試験勉強はだめというわけではないと思う。従来の図書館の資料だけではなく、図書館という環境を利用して、何らかの色々な活動に資するという場になるとすれば、それもプラスの意味で受けとめたほうがよいという議論を、今期はしてきたので、むしろ肯定的な意味になるように、言葉を少し変えていただくのがよいと思う。
中井委員	W i - F i につなぐためだけに来ている人たちをそのまま帰すのではなく、彼らをつかまえる努力をしないとイケない。そういった人たちと都立図書館が持ちである資料をどのようにつなげていけるかがすごく大切で、次に何か展開できる展示やイベントが必要だと思う。
内田委員	「ウィキペディアーツ」は、もしかしたら、注釈をつけたほうがよいと思う。
川原田委員	7 ページで長時間利用者に向かって多様な空間を設けるというまとめがされており、ここで書かれているのは机の大きさや照明の照度など機能の部分のみとなっているが、これにプラスアルファして居心地がよいというような視点があると、今までの提言がもう少し人に届くことにつながっていけるのではないかな。
川原田委員	16 ページの「人に届くウェブデザイン」の内容が、情報が的確に人に届くというやはり機能についてのみの内容になっている。部会で発言させていただいたときには、機能プラス人の心、気持ちに届くというウェブデザインが必要ではないか、人がワクワクするような部分があると、初めてページを見た人がこの図書館に行きたいと思うのではという話もしていたので、そういうプラスアルファの部分があると、よりよいと思う。
豊岡委員	9 ページの「児童・生徒の学びの支援」は、プログラムをつくるにあたっては学校の教師のニーズであったり、当然子供たちのニーズであったり、そういったものの記述を少し入れていくことで、フレームの厚みが出てくるのではないかな。また、10 ページに「司書教諭や学校司書を中心とした学校図書館関係者と連携しつつ」という文言があるが、それに限らず、まさに直接かかわっている教師、校長を中心とした教員の意見も重要という部分も多分にあると思う。 あとは保護者、地域の声も当然加味してというところを踏まえると更に厚みが出てくると思う。
小田議長	「第四章 今後に向けて」について。さらにより長期的な、違う観点からもこういう課題があると整理したほうが、わかりやすくなるのではないかな。 また、下から2つ目の段落に「存在意義（ミッション）」とある。その後の文章に「ミッションをアレンジ」という文章があるが、ミッションをアレンジしていいのかという話が出てきやすくなるので、言葉を変えていただくとありがたい。